

# 英霊は悲しんでいる！ 眞の慰霊とは何か？

陸士54家族会員

奥本 康大

旧陸軍落下傘部隊所属だった父（奥本 實）は、パレンバン奇襲作戦（昭和17年2月14日）に参戦、「殊勲甲」の手柄をあげ、昭和天皇に単独拝謁を賜わった。当時、一介の陸軍中尉に対しては前代未聞の出来事であった。

昭和天皇は戦後、「大東亜戦争は石油で始まり石油で終わった」とご述懐されたが、パレンバン奇襲攻撃によって得られた石油量は当時の日本の年間消費量に匹敵したのだから、昭和天皇のお喜びも無理もない。その年の7月には宇都宮で落下傘部隊の特別演習をご視察されたことから窺える。大東亜戦争が3年半も戦えたのも、パレンバンはじめとする多くの石油基地を緒戦に制圧したことによると言っても過言ではない。しかし、その華々しい戦果も今の時代においては知る人が少なくなっている。また大東亜戦争を語ることも憚れるような時代でもある。

2年前、父の遺した手記をもとに書籍を上梓したが、このことが縁となり、自分は国内外の旧落下傘部隊の戦跡に

赴き、慰霊活動を続けている。

昨年はフィリピンのレイテ島を訪ね、薫空挺部隊、高千穂降下部隊の戦跡を訪れたが、現地には2つの部隊の奮戦の足跡すら見出すことが出来なかった。非常に悲しい思いで帰国した。

パレンバン奇襲作戦を知っている人はいても、薫空挺部隊や高千穂降下部隊は殆ど知られていない。この2つの部隊は、ともにアメリカ軍に制圧されたレイテ島内にある飛行場奪還作戦に投入された落下傘部隊であり、昭和19年の11月と12月に出撃している。

薫空挺部隊は台湾義勇兵を中心とした60名が、ドラク飛行場、ブラウエン飛行場群に向けて出撃したが、帰還した将兵はいない。

また高千穂降下部隊は挺進第3聯隊、第4聯隊で構成された約6百名が、タクロバン、ドラク、サンパプロ、ブラウエン北、ブラウエン南の各飛行場に出撃したが、地上の第26師団との連携作戦が出来ず、壊滅したのである。

なぜ、2つの部隊の足跡が判らなかつたかと言えば、目印となる慰霊碑すら見当たらなかつたからだ。

ご存知の方も多いが、レイテ島では8万人の将兵が散華された、謂わば玉砕の島である。その為、現在でも島内には、至る所に日本軍の慰霊碑や碑文

が立てられている。

戦後はご遺族による慰霊巡拝が盛んにおこなわれたが、ご遺族の高齢化等に伴い、現在は訪れる人も少なくなっている。その証拠に朽ち果てて、草に覆われた慰霊碑も数多く見られた。

悲しいことは、ブラウエン市内にあった「高千穂降下部隊」の慰霊碑が無くなっていたのである。（10年くらい前はあった。靖國偕行文庫の資料に記載あり）

国の為、家族の為に戦い散華された英霊を慰霊・顕彰することは、今を生きた日本人の務めと考えているが、これでは日本人の記憶から消え去ることは眼に見えている。

自分は「英霊を2度死なせてはいけぬ」と各所で唱えている。1度目は肉体の死、2度目は人々の記憶から忘れ去られる死である。レイテ島ブラウエン市内の慰霊碑が建立されていた場所に、碑文を備えた記念碑を建立できればと考えている。

次に沖縄戦に散った義烈空挺隊の慰霊碑について述べる。

昭和20年5月24日に沖縄のアメリカ軍に奪われた読谷飛行場、嘉手納飛行場に出撃したが、胴体着陸に成功した1機の隊員たちにより破壊工作に成

功。33機の航空機を破壊、アメリカ軍に甚大な被害を与えたが、奥山道郎隊長以下113名が散華されている。

この読谷村には粗末な木柱の慰霊碑が立っている。以前の碑は着陸地点に立てられていたが、中学校建設に伴い、容易に見つけることの出来ないサトウキビ畑の片隅に追いやられ、寂しく立っている。反戦思想の強い読谷村が着陸地点の建立を認めなかった。

また、戦争の歴史が消えていく中で、自分たちは単に英霊の慰霊をするだけで良いのかと疑問が湧いてくる。英霊は叫んでいるに違いない。「自分らは国を守るために雄々しく戦ったのだ」と。残念ながら大東亜戦争を検証することもなく、「侵略戦争」との定義が反日メディアにより誘導されている。靖國神社で祀られている英霊を、正しい戦争に参戦した「英雄」として顕彰しなければ、いつまで経っても浮かばれることはない。

また、正しい戦争の歴史を後世に伝えるには、慰霊碑だけでなく、顕彰碑や記念碑の建立が必要であり、これにより英霊の名誉を回復することが現代を生きたる我々の責務と考えている。

まず最初に、多くの賛同者の協力を得て、国内の落下傘部隊に関する顕彰碑や記念碑の整備から始めたいと考えている。